

Online news を使った大学生の 英文リテラシー育成の試み

吉 村 富美子

I. 序 論

この論文では、大学生の英文の読み書き能力の育成を目的とした online news を用いての統合的な英語指導の試みについて報告する。筆者は、2000 年に出した「大学におけるレポート・ライティングの教え方について」という論文の中で、高校と大学における読み書きの相違を基に、大学におけるレポート・ライティング指導についての提案を行った。その際に大学で期待される読み書きの仕方を促進する道具としてのインターネットの可能性に言及したが、その後の ICT (Information and Communication Technology) 環境の変化によって、提案した読み書きの仕方を指導する環境が整ったため、2016 年度の英語コミュニケーション演習 I~IV の授業において online news を使った英語指導を試みた。

II. 2000 年の論文の概要とその後のインターネット環境の進化

1. 2000 年の論文の概要

2000 年の論文では、Sociocultural Constructivism の考え方 (Duffy & Cunningham, 1996, p. 175) を理論的枠組みとして、読解過程を「テキストと読み手の読む目的と読者の持つ背景知識が相互作用を及ぼしながら、意味を構築していく過程」と捉え、作文過程を「書き手と書く課題と書き手の書く過程が影響しあいながら新しい意味が創り出されていく過程」と定

義し (p. 51), 高校までの読み書きと大学で期待される読み書きの相違点を 6 つ特定した。具体的には, ディスコースの違いや読解過程の違い, 読み書きの主体の違い, 文章を書く目的の違い, 複数の文献を読んで書くこと, 書く分量の増加, 情報の出典を明示することの 6 つである。

大学に入ると, 文献の内容をただ単に理解するだけではなく, メタ・ディスコース¹等に注意しながら文献そのものの信憑性や自分の目的や他の文献との関連性まで考慮して読むことが期待されるようになる。また, 高校までと異なり, 大学では自分が主体となって学習を進めなければならない。大学でリサーチペーパーを書く場合は, 自分のレポートの目的に沿った文献を選択し自分の視点で読むという選択的読解 (selective reading) を行う。そして, 自分の目的のために情報を新たに構築し直すということをする。そのためには, 文献の中の情報の関連性について熟考する必要が出てくる。また, 大学においては, あるトピックについて理解するために, 複数の文献から情報を集めてその全体像を理解しようとする。もともとは別々の目的のために書かれた複数の文献を読んで, 自分の目的のためにそれを統合しようとする時, 意味の再構築という側面は, より強調されることになる。大学においては, 書く分量も増加する。分量が増加すれば, それだけワーキングメモリへの負担は増加するので, ライティング・プロセスを分けて書き進める等の書き方の工夫をしなければならなくなる。さらに, 大学で書くレポートにおいては, 出典を明示することが求められる。こうすることで, 他人の文章や他人の意見, あるいは他人の研究から得た

1 メタ・ディスコースとは, ディスコース (discourse) についてのディスコースである。ディスコースとは, 談話のことで, 話されたり書かれたりした文章において意味のまとまりを有する複数の文の連続体を指す。ディスコースのディスコースであるメタ・ディスコースの役割としては, 主張の信憑性について述べたり, 筆者の態度を示したり, 読者を筆者との対話に引きこむ等がある。(Crismore, 1989)

情報をどのように統合しながら自分の意見を構築していったかを示さなければならない。

次に、上記のような高校までと大学における読み書きの相違を踏まえて、大学社会で期待される読み書きの仕方を学生が身につけるための指導法についての提案を行った。具体的には、(1) 書くという行為を学生主体の活動だと認識させること、(2) 文献を読む際にその重要性や他の文献との関連性を考慮した読み方をさせること、(3) レポートを書く目的を明確に意識させながら文献検索、読解、レポート・ライティングを指導すること、(4) 複数の文献を読ませてレポートを書かせること、(5) ワーキングメモリを効率よく使えるようにライティング・プロセスをガイドすること、(6) 情報の出典を明らかにさせることの6つである。最後に、インターネット上の読み書きがこの大学社会で期待される読み書きの仕方を促進する可能性について言及した (pp. 59-60)。

インターネット上には膨大な数の文献が存在するので、すべての情報に目を通すことはできない。そこで、情報の選択が必要になるわけだが、それを可能にするのが検索エンジンを使ったキーワード検索である。しかし、このためには検索の目的が明確でなければならない。そして、読み手はこのようにして収集した情報の全体的な理解の枠組みを自分で創り出さなければならない。また、インターネット上の文献は、その信憑性において大きなばらつきがあるため、読み手は情報の妥当性、信憑性、自分の目的との関連性等を考慮して読まざるを得ない。さらに、インターネットには、ハイパーテキストが使われている。ハイパーテキストとは、リンクという機能によってさまざまな情報の関連性を実現できるテキストのことで、紙上では直線的な読み方しかできないが、ハイパーテキスト上では上へ下へ、全体から細部へ、関連性のある別のページへと自分の目的にあわせた読み

方ができる。書き手は、このようにして集めた情報を自分の目的のために再構築しなければならない。インターネット上の読み書きのこれらの特徴が大学で必要とされる読み書きと類似しているため、インターネットを用いることで大学でのレポートライティングを目に見える形で指導でき、学生たちの読み書き能力の育成に貢献できるのではないかというのがその主旨である。

2. 2000 年以降の ICT 環境の変化

2000 年以降、ICT 環境は大きく変化した。それは、インターネット上の情報量が増加の一途を辿っただけではない。2004 年に Web 2.0 という造語が作られたように、ICT 技術の発達私たちの生活様式そのものを大きく変化させたのだ。ここ十年を振り返ると、Facebook, Twitter, Instagram 等 SNS (Social Networking Service) としての利用が増加し、スマートフォンの普及とも相まって、インターネットはより身近な存在となった。現在の大学生は、デジタルネイティブとかネットジェネレーションと呼ばれ、生まれた時からパソコンやインターネットが存在し、常時生活の中でインターネットとつながっている世代である。調べたいことはすぐに手元のスマートフォンで調べることができる。従来の紙媒体と同じくらい、あるいはそれ以上に、インターネットから情報を得ている可能性のある世代もある。学生のインターネット利用が日常化した今だからこそ、インターネットを利用して大学生に必要とされる読み書き能力をつけさせることができるのではないかというのがこのアクション・リサーチ²の動機であった。

2 アクション・リサーチ (action research) とは、教員が授業や学習過程を研究するプロセスのことで、教員が研究課題を設定して、その解決方法を試み、授業や学習者の様子からデータを取り出し、効果を測定する方法である (British Council, 2002)。研究者と授業者が同じであるため、結果を一般化することは

3. なぜ online news か

この研究においては、インターネット上の複数の online news を用いて学生に読み・書き・話す指導を行い、その効果を分析した。この中には、「書くために読む」(reading to write³)と「様々な文献を読んで書く」(writing from sources⁴)が含まれている。なぜ online news なのかというと、まずほとんどの online news は従来の新聞社が提供しているため、情報の信頼性がある程度保証されているからという理由と、新聞記事の特徴である個々の記事は比較的短く一般の読者向けに書かれているので専門知識を必要としないという特徴があるからだ。さらには、online news を含む新聞記事は、書き言葉 (academic English, in Gillett, n.d.; the language for schooling, in Scheppegrell, 2004) で書かれており、語彙の難しさ、複雑な文構造、名詞化⁵による情報の凝縮等、書き言葉特有の特徴を持っている。これらの特徴は、大学で用いる教科書や大学生が読むべき論文と共通している。次に、online news は紙媒体の新聞記事とは違い、検索エンジンを用いたキーワード検索ができるため、読む目的によって自分の読みたい記事に瞬時にアクセス可能だからである。このため、一つのトピックについて、複数の情報源から情報を収集できる。しかも、そのほとんどが無料か安価である。紙媒体の英字新聞が日本では手に入れにくく高価であるのに比べると、

難しいが、教育においては主に授業改善の方法として使用されている。

- 3 例えば Spivy (1995) は、書くために読む (reading to write) 場合は、単純に読むことと書くことを組合わせるのではなく、書くという目的自体が読解過程に影響を与えると述べる。
- 4 Wiley and Voss (1999) の実験結果は、複数の文献を読んでレポートを書く (writing from sources) ほうが一つの文献を読むよりも意味の再構築が促進されること (transformed) を示している。
- 5 名詞化とは、本来動詞や形容詞であったものを名詞形として文章中に用いることである。名詞化されることによって文章の主語や目的語、前置詞の目的語として用いることができるようになり、より多くの情報を一文中に凝縮することが可能になる。

Online news を使った大学生の英文リテラシー育成の試み

online news は入手しやすい。いくつかの情報源からの記事を比較しながら読むことで、その内容や書き方を比較できるというメリットもある。国内外の情報源による比較を行ったり、書き手による比較を行うこともできる。日本の新聞社が提供している英字新聞の中には日本語の記事を英語に翻訳したものもあり、日本語の記事とその英語翻訳版を比較することも可能だ。

このように、大学生が読むにふさわしい英文テキストとしての特徴もっていることとインターネットの利便性を利用できるものとして online news は格好の英語教材となりうると考えた。

III. インターネット上の online news を使ったアクション・リサーチ

1. 研究課題

このアクション・リサーチの研究課題は、インターネット上の online news を使った統合的な英語指導によって、大学で期待される文章の読み書き能力を学生に身につけさせることができるかである。具体的には、大学特有の (1) 学生主体の読み方, (2) 批判的な読み方, (3) それに基づく情報の再構築を促すことができるかどうかである。さらには、今回は英文テキストを用いたので、(4) 英文の読解力と作文力を身につけさせることができたかどうかも研究課題とした。

2. 研究対象の授業

この研究は、2016年度の英語コミュニケーション演習Ⅰ～Ⅳの授業を対象として行った。英語コミュニケーション演習Ⅰ・Ⅱは3年生用の授業で、Ⅱ・Ⅳは4年生用の授業だが、3年生と4年生の合同クラスであるため、英語コミュニケーション演習のⅠ・ⅢとⅡ・Ⅳでは同じ授業を3年生と4

Online news を使った大学生の英文リテラシー育成の試み

年生が一緒に履修している。この授業の履修者は、3年生8名、4年生7名であった。

前期の授業では、英語で書かれた online news 一つをよく読んで理解し、それをまとめてわかりやすく英語で説明すること (summarizing) を目標とした。これは、先行研究 (e.g., Karbalaei & Amoli, 2011; Katims & Harris, 1997; McNamara, 2004) において、読解した内容を自分の言葉で説明することが内容理解を深めることが報告されていることによる。授業では、まず教員がモデルを使って online news の読み方と要約 (summarizing) や言い換え (paraphrasing) の方法を教えた。次に、学生たちは、それぞれ自分が興味のあるトピックを決定し、online news を探して読み、その内容をわかりやすく説明するために要約や言い換えの工夫を行い、調べた内容について発表会で口頭発表を行った。最後に、学生たちはその発表と同じ内容についてレポートにまとめて提出した。

後期の授業の目標は、一つのトピックに関する3つ以上の online news を読んで、それらをまとめて英語で説明することであった (writing from sources)。近年、引用文を書くことはトピックについての理解を深める可能性があることを示唆する研究 (e.g., Wiley & Voss, 1999) が報告されている。そこで、後期は、さまざまな視点から書かれた文献を引用しながら選んだトピックについて原稿を書き、それを発表するという課題を出した。まず、教員がモデルとなる英字新聞記事とその翻訳もとである日本の新聞記事、さらには同じトピックについての英語圏の英字新聞記事を比較しながら、何をどう伝え、どんな表現が用いられているかに注目させたり、文献間の相似点や相違点に注目させたりしながら、新聞記事の読み方を教えた。その後、学生たちは、自分の興味のあるトピックについて3つ以上の文献を探して読み、その概要や文献間の相似点・相違点をまとめ、その比

較に基づく考察について英語で口頭発表を行った。さらには、引用のルールについての説明に基づいて発表と同じ内容についてレポートとしての形式を整えて英文レポートを提出した。Online news は、基本的には日本の英字新聞記事とその日本語版、さらに同じトピックに関する外国の英字新聞記事を見つけるように指示した。

3. 分析方法

研究課題の検証には、後期の最終日に提出してもらったレポートと最終日に書いてもらった事後アンケートの回答をデータとして用いた。2000年の研究が「複数の文献を読んで書くレポート・ライティング」(writing from sources) を中心とした研究であったので、この研究との関係上、前期の授業 (summarizing) のレポートやアンケートの回答、前・後期の口頭発表については、今回の研究データとしては除外した。研究データに使ったレポートの分析には、学生たちが書いたレポートの英文の分量、引用文献数、引用文献の内訳については量的分析を行い、英文の内容や英語表現については質的分析を行った。事後アンケートの質問では、(1) 課題遂行にあたって、頑張った点、工夫した点、よくできた点、(2) 頑張りが足りなかった点や難しいと感じた点、(3) 課題に取り組む中で考えたこと、感じたこと、学んだこと、(4) 課題遂行の各段階 (自分が決めたトピックについて複数の文献を探して読む、読んだ文献をまとめる、発表原稿を書く、原稿の推敲と校正、口頭発表) で英語学習者としての自分について考えたこと、(5) 振り返ってみて、自分は何が得意 / 不得意か、何を楽しいと思うかの5点を尋ねた。この事後アンケートは記述式であったので、まず回答を質問ごとにまとめて、リストとして書き出した。その後、記述の多かった項目ごとに回答をまとめ直し、課題遂行のプロセスの順序で並べ直した。

IV. 研究結果

学生たちが書いた英文レポートの特徴の概要は次のとおりである。レポートの英文の平均的な分量は、A4 用紙シングルスペースで約 1.88 枚 (約 2,000 words) で、引用文献数の平均は 3.58 個であった。引用文献の内訳は、外国で出された英語の online news (42.5%)、日本で出された英語の online news (27.5%)、日本で出された日本語の online news (7.5%)、その他 (22.5%) である。代表的な引用文献としては、*The Guardian*, *The New York Times*, *The Mainichi*, *The Japan Times* 等がある。Online news 以外では、スポーツ団体や個人のホームページ、Wikipedia, Twitter, Google 翻訳などが用いられていた。学生たちが選んだトピックは、大まかに分けると下の 3 つに分類できる。1. Brexit, アメリカ大統領選, 天皇の退位問題など政治的なトピック, 2. サッカーの判定, 新しく日本にできたバスケットボールリーグの話題など自分が興味のあるスポーツやスポーツ選手について, 3. 「ポケモン Go」, 映画「君の名は」「スマップ解散」等, 当時日本で話題になっていた事柄についての日本と外国における評価の比較についてである。英語の特徴として全体的に目立ったのが次の点である。このレポートは口頭発表の原稿をレポートの形式に整えたものであるため、聴衆を意識したせい、原文に用いられていた書き言葉を自分の言葉に変えて説明することがかなりうまくできていた。ただ、レポートを書いた後の校正が不十分で、文法間違いが多く見られた。

事後アンケートの結果は、以下の通りである⁶。記述の多かった項目について、トピックの決定から、文献の収集、読解、まとめ、発表原稿の作成、

6 () 内は、学生たちのコメントの内容を読者にわかりやすくするために筆者が説明を加えた部分である。

推敲, 校正, 口頭発表に至るまで, 工夫した点, 苦労した点, 気づき等をまとめた。

トピックの決定を自分で行ったことに関しては, ほぼ全員の学生が「楽しかった」とか「よかった」と回答し, 好意的に受け止めていることがわかった。また, 自分なりに工夫した点について尋ねたところ, 例えば, 「チャンキング⁷で(記事の英文を)細かく区切って, 一つひとつ辞書を引いて和訳した。」「なるべく多くの視点から意見を集めた。事実を伝えるだけでなく, この問題が大きくなった要因を自分なりに考えた。」「記事の内容だけでなく(トピックである)内村選手について最初に調べた。」「新聞+Twitter も読み込み, #PokemonGo で調べ, ユーザーは Twitter で何を発信しているか調べた。」等の回答があり, 課題遂行において, 英字新聞を解説するための工夫やさまざまな情報源を調べてトピックについて理解を深めるための工夫をしていることがわかった。複数の文献を読んでまとめるという作業については, 「日本と外国の視点を互いの視点から見るのが楽しかった。」という意見がある一方で, 「構想を(自分で)考えるのがなかなか大変でした。」「テーマについて多数の記事があり, 求めている資料か判断するのが大変だった。」「資料を多く集めすぎ, 読みにだいぶ時間をかけてしまったのが良くなかった。また, まとめきれず自分の言いたいことをうまく言い切れなかった。」「新聞を読むことに時間がかかり, その題材を自分のレポートにするために深く読むことができませんでした。もっと違う視点を見つけることができるように思いました。」「各国の新聞に関連性を持たせるのが難しい。」等の情報統合の難しさを指摘した回答も多くあった。

7 チャンキング(chunking)とは, 意味のまとまりごとにテキストを理解していく方法で, 長く複雑な英文を読む場合に読み手の理解を補助する方法である。

Online news を使った大学生の英文リテラシー育成の試み

この課題を遂行する中で気づいたことについて尋ねたところ、「複数の国の英字新聞を読んで、国によって報道のされ方や説明の仕方に違いや特徴がみられてとても勉強になりました」「日本と外国の考え方はほとんど違って、改めて文化の違いを感じられた。」「私は Online news を見ることは意外と好きなのかなと思いました。日本の記事と比較して読んでみると異なっている部分を見つけて、なぜなのかという考えを持ち、調べる学習は自分に向いていると感じました。」のような回答に見られるように、文化による考え方の違いや報道の仕方の違いに気づいたり、調べることの楽しさに気づいたようであった。ただ、英語で発表原稿を書いたり、推敲や校正をするという作業については、「書くことに関してはまだ力不足だと感じた。」「自分の英語で書く、間違い文法等を訂正することに関しては不得意だと感じました。」のような英文ライティングの大変さや難しさを指摘する感想が多かった。

英語学習者としての自分について振り返ってもらう質問に対しては、「新しい情報を読む、知ることは楽しいのですが、その内容を自分の言葉にすることが苦手です。その訓練が自分には必要だと感じました。」「レポートを書く際、文と文のつながりの言葉の知識が足りなかったので、少し違和感がありました。文章の構成をせっかく覚えたので、次はつながりの言葉にも注意して、少しでもよりよい英文レポートに完成させたいと思います。」のようなコメントに見られるように、自分の英語力や英語学習について客観的に分析し改善の工夫について言及した学生もいて、知識やスキルの不足への気づきを積極的にとらえて次の学習に生かそうとしていたことが伺える。なお、先の研究との関係上研究課題には入れなかったが、口頭発表については多くの学生が楽しかったというコメントを書いていた。また、聴衆を意識したことで、わかりやすくするためのさまざまな工夫を各学生

が行っていることもわかった。

V. 結果の考察

ここでは、上記のレポートの量的・質的研究結果と事後アンケートの分析結果を具体的な研究課題に沿って考察する。

まず、研究課題(1)の学生主体の文献の読み方ができたかどうかについては、全員が自分の興味のあるトピックを中心にインターネットを使って情報収集を行うことができたことと、この検索をインターネットのキーワード検索機能が促進したことは間違いないので、効果的であったと言える。学生のアンケートへの回答の中に文献間の情報統合の難しさを指摘したものが散在したことからも、学生たちが自分が研究の主体となり、一つの文献に依存することなく自分の目的のために文献を利用したことがわかる。

研究課題(2)の情報そのものの信憑性や自分の研究トピックとの関連性などを考慮した批判的な読み方(critical reading)ができたかどうかについては、学生たちのレポート中に情報源による意見や報道の相違についての記述が多くみられたことと、アンケートへの回答の中で文化による意見の違いや報道の違いに気づいたというコメントが多かったことから効果があったと言える。学生の中には、Twitter, Wikipedia, Google 翻訳を資料として用いた学生もいた。資料としての信憑性が疑問視されるこれらの機能については、学生たちはそれらを信頼できる情報源として扱うのではなく、トピックについての全体像を知るための手掛かりとして Wikipedia を用いたり、自分の選んだトピックへの生の反応を知るために Twitter 上のコメントを収集したり、英字新聞の内容と Google 翻訳を比較し Google 翻訳機能自体の検証を行ったりと、それぞれの機能の特質をよく理解して自

分の目的のために利用していた。ちなみに、Google 翻訳を用いた学生は、Google 翻訳を使用することによる長い文章の概要理解への有効性と短い文の翻訳の正確性を指摘していた一方で、助詞の誤りの多さと一文が長い場合の誤りの増加を指摘していた。

研究課題(3)の複数の情報源からの情報の再構築(writing from sources)については、情報統合の大変さや難しさについてのコメントが多く、学生が苦労した様子が伺える。学生のレポートの中には文献を比較しその視点や意見の違いを中心にレポートを書いている学生がいた一方で、異なる情報を異なる文献から収集しそれを組合せただけのレポートもあり、情報を自分なりに評価して読みその信憑性まで考慮する読み方ができた学生と、情報を事実として読み情報そのものの質について疑問をもつ段階までいかなかった学生がいたことがわかった。しかしながら、複数の情報源から情報を得たからこそ、Duffy and Cunningham (1996)があらゆる分野における問題解決の成功の要件としてあげている、原文の著者の理解を離れて(decentering)、トピックに関する理解の枠組み(the overall structure of a topic)を自分自身で作り上げなければいけないという意識を多くの学生が持ったと考えると、学生たちは大学で求められる批判的な文献の読み方に近づいたと言えるのではないだろうか。

最後に、研究課題(4)の英文の読解力と作文力が身についたかどうかについては、アンケート調査からは、読解に時間がかかったり自分の言葉にするとところで格闘したりして、英文の読み書きに苦労していた様子がうかがえた。Online news で使われる書き言葉の特徴である、複雑な語彙、長く複雑な文構造、情報の凝縮等の特徴が文献理解を阻害したのではないだろうか。ただ、学生たちが書いたレポートからは、情報源である online news をなんとか読みこなし、原文の表現をそのまま用いるのではなく、

自分の言葉で説明することができていた。

VI. 結 論

佐渡島（2014）は、「インターネットで情報がほしいままに手に入るようになった今、必要とされる能力は、《情報を再定義する力》ではないだろうか。ふんだんに与えられる、様々な立場の様々なジャンルの文章—それらを個々に読み取り、目的に合わせて新たに意味付けし、取り込む。こうして自身の意見を構築する。それが現代の若者たちに求められる力である。」（p. 23）と述べている。筆者は、2000年に出した論文において、このような能力の育成をインターネット利用が促進する可能性について述べたが、今回のアクション・リサーチを通して、インターネット上の複数の online news 記事を用いて読み書き発表を行う統合的な英語指導は、大学生が身につけるべき英文リテラシーの育成に貢献する可能性が大いにあるという確信をもった。

この研究の限界として、次の点が挙げられる。まず、アクション・リサーチの性質上、研究者と授業者が同じであるためデータの解釈に主観が入っている可能性がある。統制グループがないため、データに表れた特徴が今回の指導によるものかどうかの特定はできない。また、研究の参加人数が少ないため、研究結果を一般化することはできない。この研究結果は、上記の点を考慮して解釈されなければならない。

ただ、上記の研究の限界はあるものの、今回の研究では、2000年の論文の中では可能性の示唆にとどまっていたインターネットが大学で期待される読み書き能力の育成に貢献する可能性について、不十分ながら実際教室指導に応用し、その効果について報告できた点において意義があると考ええる。今後ますます ICT が発達していくことが予想されるが、それをど

のように授業で活用すると学生の学習の深化に貢献できるのかについては、これからも研究を継続していかなければならない。

参 考 文 献

- 佐渡島沙織「アカデミック・ライティング教育と情報リテラシー：《情報を再定義》し意見を構築できる学生を育てる」『情報の科学と技術』64巻1号, pp. 22-28.
- 吉村富美子「大学におけるレポート・ライティングの教え方について」『九州情報大学研究論集』第2巻, 第1号, pp. 49-62.
- British Council (2002). Action research. Retrieved from <https://www.teachingenglish.org.uk/article/action-research>
- Crismore, A. (1989). *Talking with readers: Metadiscourse as a rhetorical act*. New York: Peter Lang.
- Duffy, T. M. & Cunningham, D. J. (1996). Constructivism: Implications for the design and delivery of instruction.” In D. H. Jonassen (Ed.), *Handbook of research for educational communications and technology* (pp. 170-198). New York, NY: Simon & Schuster Macmillan.
- Gillett, A. (n.d.). Features of academic writing. Retrieved from <http://www.uefap.com/writing/feature/featfram.htm>
- Karbalaei, A. & Amoli, F. A. (2011). The effect of paraphrasing strategy training on the reading comprehension of college students at the undergraduate level. *Asian EFL Journal*, 13 (3), 229-244.
- Katims, D. S. & Harris, S. (1997). Improving the reading comprehension of middle school students in inclusive classrooms. *Journal of Adolescent & Adult Literacy*, 41 (2), 116-123.
- McNamara, D. S. (2004). SERT: Self-explanation reading training. *Discourse Processes*, 38, 1-30.
- Schleppegrell, M. J. (2004). *The language of schooling: A functional linguistics perspective*. New York, NY: Routledge.
- Spivy, N. N. (1995). Written discourse: A constructivist perspective. In L. P. Steffe & J. Gale (Eds.), *Constructivism in education* (pp. 313-329). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Wiley, J. & Voss, J. F. (1999). Constructing arguments from multiple sources: Tasks that promote understanding and not just memory for text. *Journal of Educational Psychology*, 91 (2), 301-311.